

歩き遍路を主体とした鳴門教育大学「阿波学」における 教科横断型授業の展開

木原資裕*, 皆川直凡**, 立岡裕士***,
藪下克彦****, 内藤隆*****, 田村隆宏*****,
南隆尚*, 町田哲***, 久米禎子*****,
眞野美穂****, 畠山輝雄**, 小倉正義*****

(キーワード: 歩き遍路, 教科横断型授業, 阿波学, 地域文化研究)

1. はじめに

四国遍路は弘法大師(空海)修行の遺跡巡拝に関連する88寺院をつなぐ約1400kmの行程である。そこには、庶民信仰の霊場としての空間やお接待・善根宿といった文化的習俗が醸成されており、信仰という宗教的な側面を持ちつつ、その枠を越えた文化財として注目されている。

近年では旅行会社が企画する観光バスを用いるものやマイカー、ロードバイク等での四国遍路も多くみられる。もちろん、現在も歩き遍路は存在しており、そこには宗教的信仰とは趣が異なる癒やしや自分探しといった自己の内面へのベクトルが意識されているように思われる。

また、歩き遍路を活かした教育実践が四国内での大学で授業として展開されている^(注1)。特に、鳴門教育大学においては2007年度～2009年度の文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代GP3年間継続研究)に「遍路文化を活かした地域人間力の育成」⁽¹⁾が採択され、2008年度より、歩き遍路を主体とした教養基礎科目「阿波学(地域文化研究)」が実施され、現在に至っている。そこには例年、専門領域が異なる約12名程度の教員が関わっている。

この学部授業「阿波学」への歩き遍路体験導入過程については、梶井らにより、「学生教育における四国遍路歩き体験授業の意義と課題—「阿波学」の試み—」として報告されている⁽²⁾。ここでは、鳴門教育大学における取組の特色として、以下の2点をあげている。

①学生の歩き遍路体験授業を学部・大学院に展開する全学的なプログラムとして設計し、実践的な人間形成プログラムとして推進している。

②教育大学としての教育実践であり、教職志望の学生へ遍路体験を通じ、遍路文化の人文的な理解の深まり、その文化を支えてきた地域社会や人々をまなごす視座、自己の振り返りや問い直しの姿勢、ともに歩く友人との助け合いや協調の意識など、それらを涵養する契機となることをねらいとしている。

また、梶井らは地域社会との連携や情操教育充実が課題とされる今日の教育事情にあって、その担い手たる教員の資質向上に資することをこの「阿波学」に期待している。さらに、「教育の一番札所」を唱える鳴門教育大学が四国遍路文化を活かした特色的な授業を備える意義は必ずしも小さくないとしている。

本論文は梶井らの教育実践報告から10年を経た継続教育実践であり、さらに今日的教養課題である教科横断型授業のあり方を射程に入れ、その授業実践の具体的な事例を提示しようとするものである。また、そのことを通して、今後の教科横断型授業研究の基礎的な資料となることを目的としている。以下、授業の全体像ならびに各

*鳴門教育大学 保健体育科教育実践分野

**鳴門教育大学 学習指導力開発コース

***鳴門教育大学 社会科教育実践分野

****鳴門教育大学 英語科教育実践分野

*****鳴門教育大学 美術科教育実践分野

*****鳴門教育大学 子ども発達支援コース

*****鳴門教育大学 心理臨床コース

担当教員による教科ごとの実践と意義を示し、その後に学生による授業評価の分析から本授業の教科横断型授業の課題を考察することとした。

2. 教科横断型授業

2002年度から教育課程に導入された「総合的な学習の時間」において、「横断的・総合的な学習など創意工夫を生かした教育活動の充実」をねらいとする授業展開が多くの小・中・高校等の学校現場でなされている。さらに、中央教育審議会答申（2016）では、2030年の社会を見通した答申があり、「6.何を学ぶか ―教科等を学ぶ意義と教科間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成―」の中で「様々な資質・能力は、教科等の学習から離れて単独に育成されるものではなく、関連が深い教科等の内容事項と関連付けながら育まれるものである」⁽³⁾とあり、教科における専門性を重視した教科横断型授業のあり方が指摘されている。そのような流れの中で鳴門教育大学教職大学院（教科）においても発足当初（2019年度）から必修専門科目として「教科横断型単元の構成」と「教科横断型単元の学習」の授業が組み込まれている。

本研究対象である鳴門教育大学の学部授業「阿波学（地域文化研究）」（2単位／以下「阿波学」と略す）においても、歴史・地理・心理・英語・美術・体育等を専門領域とする担当教員12名が学生とともに1泊2日寝食を共にしつつ、歩き遍路を行い、それぞれの専門領域を活かした教科横断型の授業を展開している。

3. 「阿波学」における事前指導とその運営

2019年度のシラバスは次ページ表1の通りである。

2008年度当初は2泊3日で50～60km行程であったが、大学改組に伴う予算削減のため、2015年度よりは1泊2日で40km行程となっている。

最初のガイダンスは4月の初回授業時に開催されている。ここでは、授業の目的・内容と計画（スケジュール）・評価方法・留意点について説明、および準備品の購入説明が行なわれる。スケジュールの説明では、第2回以降の授業は7月第1週から始まること、第2回以降の授業はそれぞれテーマを決めてその専門の教員から講義が行われ、前期授業終了時にかけて実施されること、第5回は内容が実習のための事前オリエンテーションとなるが、その授業時には班分けと実習費の集金が行われることについて説明がある。

ちなみに、事前指導としての講義の時期を前期後半に充てる理由は、宿泊を伴う1泊2日の歩き遍路実習が夏季休業中でなければ実施できず、さらに暑さの危険を避けて9月中旬から下旬にかけて行うため、受講生たちの講義内容の記憶が褪せることをできるだけ防ぐためである。

以上の様な手順で事前指導を行い、知識面での情報をあらかじめ補強した上で、9月に実施される歩き遍路実習に臨む体制となっている。

なお、実習後に行われる第15回目にあたる総括は、実習中に与えられる実践課題の解説の他、実習において何が印象に残ったか、また教師として今後活かせる経験は何かについてそれぞれ書き出させ、その後、班ごとに討議を行ない、その内容が発表されている。また、授業改善を目的として全授業に課せられている授業評価アンケートが実施され、終了となっている。

4. 教科横断型授業としての展開「遍路実践課題」

本実践は、前述のとおり、一般教養科目「阿波学」に基づくものであることから、本学におけるすべてのコースの学生が受講している。また、担当する教員も異なる複数のコースに所属している。このため、異なる視点から「阿波」を学問的に捉えることを目的に、複数教科の連携による授業実践となっている。

遍路実践課題とは、学生が遍路実習中に歩きながら遍路ルート上に点在する事象に関する課題を考えるものである。出題は、地理、歴史、英語、美術、体育など担当する教員の各専門分野からなされている。2019年度は第1日目13題、第2日目11題の合計24題が出題された。課題に対して班ごとに様々なコースの学生たちが協力しながら議論を行っている。また、課題の解説については、第1日目分は初日の夜のミーティング内で、第2日目分は後期1週目の振り返りの授業において、各担当教員が行っている。これにより、学生たちが歩きながら地域社会・文化の課題や自己の気づきが可能となる。

表1 2019年度シラバス

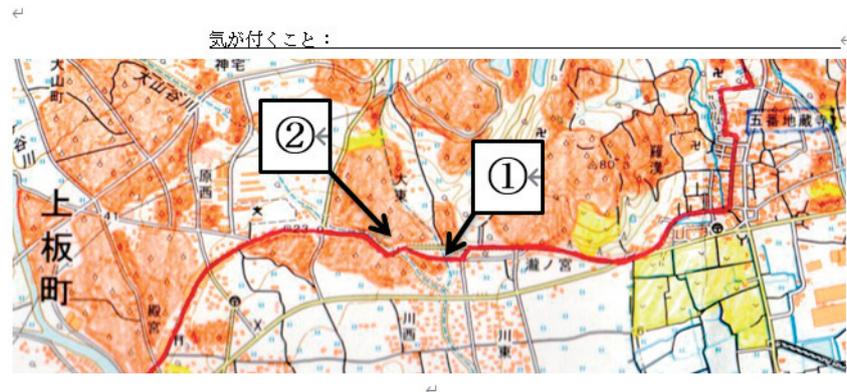
科目名	阿波学(地域文化研究)
担当教員	内藤 隆, 立岡裕士, 畠山輝雄, 町田 哲, 皆川直凡, 久米禎子, 小倉正義, 田村隆宏, 藪下克彦, 眞野美穂, 木原資裕, 南 隆尚
対象学年	1年・2年・3年
講義室	講義棟B201講義室
曜日・時限	月1・時間外
授業形態	講義・実習
開講学期	前期
単位区分・単位数	選必・2単位
授業の目的及び主旨・到達目標	<p>【目的】四国の文化アイデンティティたる遍路を体験的・実践的に学ぶことを通じ、地域理解を深め、その文化や伝統をまなざす態度や関心を養う。まず、講義により、遍路に関する基礎理解を形成する。遍路の歴史や文化、遍路と地域社会のかかわりなどについて知る。そして、実際に遍路道を歩き、現地体験のなかで地域の伝統や自然を学ぶ。遍路を支えてきた地域の人々とも交流し、その営みの現状や課題を考察する。</p> <p>【目標】講義により、地域社会における遍路文化に関する基礎理解を得る。歩き遍路実習により、遍路地域の文化や自然、遍路を支える人々の活動、自治体の取組などを直接知る。以上を通じ、教育や学校にたずさわろうとする者にとつての、地域文化を理解・尊重する基盤的態度・視座を形成する。</p>
学修課題	<ul style="list-style-type: none"> ・「講義」を通して遍路についての歴史・文化についての知識的涵養を図る。 ・「歩き遍路実習」により実際に遍路道を一部歩く体験をし、知識と体験の融合及び地域独自の文化のより深い理解を図る。
授業計画	<p>1. 授業計画 ガイダンス・四国遍路と地域文化概説(1週)</p> <p>2. 講義(2～5週)</p> <p>第2回 四国遍路と俳句の心理学</p> <p>第3回 四国遍路と地理</p> <p>第4回 四国遍路に関する歴史(近世)</p> <p>第5回 直前オリエンテーション</p> <p>3. 歩き遍路実習(6～14週)</p> <p><1泊2日の現地実習></p> <p>・日程:9月19・20日の予定</p> <p>・コース:大井小学校跡(21番太龍寺北側の麓:阿南市大井町)から23番札所薬王寺(海部郡美波町)の予定 (コースは受講者数等により変更することがある)</p> <p>4. 総括(15週)</p> <p>【授業実施方法】</p> <p>本授業は、以下のアクティブ・ラーニングの方法を取り入れ実施する。</p> <p>□発表・報告 □ディスカッション ■グループ・ワーク ■フィールドワーク □実験・実習 □授業・模擬授業 □質疑応答 ■振り返り ■その他(体験的活動)</p> <p>【実務経験のある教員について】</p> <p>本授業は、以下の実務経験のある教員により、実務経験を生かして実施する。</p> <p>■担当教員(木原 資裕, 小倉 正義)</p> <p>□教員養成実地指導講師, □ゲスト講師</p> <p>「高校教員の実務経験を生かし、団体での活動に関して適宜指導を行う」</p>
履修上の注意事項	現地実習に必要な宿泊代および飲食代は受講者負担である。鳴門教育大学と現地の往復の交通費(バス)は大学で支出する予定である。
成績評価方法	授業への出席状況、参加態度、レポートの内容などをもとに総合的に評価する。
テキスト・参考文献	<p>国土地理院の2万5千分の1地形図「馬場」「阿波由岐」「日和佐」を各自購入し、畠山教員担当授業時に持参する事。この地形図は初回ガイダンスの後、すぐに各自で書店などに注文し、必ず授業以前に入手しておくこと。</p> <p>教科書は指定しない。必要に応じて資料を配布する。</p> <p>また、上記以外に授業担当者が購入を指示する資料があることがある。</p>
キーワード	1. 四国遍路、2. 歩き体験、3. 地域理解、4. 住民の活動、5. 安全・体調管理
連絡先・オフィスアワー	内藤 隆(D412) E-mail:takashin@naruto-u.ac.jp オフィシアワー:木曜12:30～12:55

1) 地理分野

(1) 事前指導

地理分野では、事前指導において地形図による遍路実習ルートの確認および、それを用いた断面図の作成が行なわれた。遍路実習では、班別に遍路道を歩くこととなっている。このため、25000分の1地形図に教員側で設定した遍路ルートを書き写し、学生たちは、この地形図を見ながら歩くこととなる。また、地形図に書き写したルートを活用したルート断面図の作成も課題となっている。事前指導の時間が限られていることから、ルート上において500m(地図上では2cm)ごとに標高を計測し、それを方眼紙に書き写して線として結ぶという簡易的な方法がとられ、これにより遍路ルートの高低差を把握することができ、体力に応じた計画的な遍路を実践することが可能となる。

問4 以下の地形図は、25000分の1「大寺」(158%に拡大)の一部です。①の矢印の先の橋の上に立ち、川と周辺の土地を比べた時に、気が付くことを述べてください。



問5 上の地形図の②の矢印の先の地図記号が示す土地利用で主に栽培されている農作物を答えてください。

農作物名： _____

図1 地理分野の設問の例

出典：国土地理院25000分の1地形図「大寺」(158%に拡大)を一部改編。

(2) 遍路実践課題

地理分野における課題は、スマートフォン等を活用して調べることができないように、正解に到達するには現地での確認を要するように設定されている。また、事前に設定したルートを外れると課題そのものに至れない場合もある。

遍路ルート上における地形の特徴、土地利用やその変化を考えるもの、また地域の課題について考えさせるものとなっている。例えば、問4は図1における①の場所に立って川と周辺の土地を観察させ、気づくことを述べさせるものである(川よりも周辺の土地の方が低いため、天井川であることがわかる)。また、問5は②の果樹園記号が記されている所で、実際には何が栽培されているのか(柿、桃など)を現地で確認させるものである。これは、地形図から当該地域を特定する地図読解力と現地で地形の特徴や果樹の種類を特定する洞察力および知識が要求される。場合によっては、地域住民や農家の方に質問して回答を得るというコミュニケーション能力(および礼儀)も必要となる。

解説では、地形図や写真を確認させながら、当該地域が扇状地であることを理解させ、その特徴的な地形としての天井川の形成過程や特徴のほか、同地域で水はけがよいことから果樹栽培に向いていることの説明が行われている(図2)。それにより、地域産業としての農業と、それらによる土地利用と地形との関係を理解させることが意図されている。

また、地形図上で田の記号が記されている所の現在の土地利用を確認させる課題では、休耕田やソーラーパネルになっていることを気づかせ、農業の衰退とその後の現金収入の確保という過疎地域としての徳島県の特徴を把握させることが組み込まれている。さらに、空き家等のリノベーションによるサテライトオフィスや飲食店などの開業という過疎地域における地域づくりに関する問題も設定し、徳島県の課題や対策について理解することも構想されている。

2) 歴史分野

遍路道沿いには、当然ながら17世紀後半から現代に至るまでの様々な種類の道しるべが多く残されている^(注2)。『阿波学』歴史分野では、この道しるべに注目してきている。なぜならば、道しるべを通じて、以下のような四



図2 地理分野における解説時のスライド

国遍路の歴史と、それを支えてきた地域文化の一端を、深く理解できると想定される。

四国遍路とは、空海=弘法大師に救済を求める弘法大師信仰（11世紀末以降）と、下級宗教者（聖・修験者）による四国の海岸沿いの修行である「四国へち辺地」（12世紀以降）、この二つの流れが長い時間をかけて融合することで、中世末から近世初期にかけて成立した巡礼である。遅くとも17世紀半ばまでには四国にある88の札所を廻る形式が整えられ、宗教者以外の多くの民衆も参加するようになったと考えられている⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

また四国遍路は、札所を廻るだけでなく、家々を托鉢する「乞食行」と称する修行を行い、道沿いの人びとも、弘法大師と供に四国を廻る存在として遍路を見立て、これに喜捨を施したり、接待をすることで仏縁との結びつきを得ようとした。したがって四国遍路は、遍路だけではなく、こうした地域住民の存在があってこそはじめて成り立っていたといえよう。長い時間をかけて遍路を支えてきた地域住民の行為は、地域文化の一つといっても過言ではない。こうした遍路を支えた痕跡の一つが、道端に残された道しるべである。

歩き遍路実習を行うコースの中でも、例えば六番札所安楽寺から七番札所十楽寺に向かう途中にある、「真念の道しるべ」はその典型といえよう。真念は大坂を本拠地とする道心者（下級宗教者）で、『四国辺路道指南』（1687年）といういわば遍路ガイドブックを刊行した人物として著名である。それだけではなく、真念は四国の各地に、道しるべを立てている⁽⁶⁾。そこには、「左へんろみち」と道筋を示すだけでなく、「願主／真念」あるいは（右側面）「為父母六親 施主／阿州才田村／岡田兵三郎」と刻まれている。これは発起人である真念の呼びかけに応じ、地元阿波国斎田村（現・鳴門市撫養町斎田）の庄屋岡田氏が資金を供出することでこの石碑が設置しえたことを示している。この道しるべは六甲系の花崗岩に字を刻んでいることから、六甲山系から板野郡までの輸送賃や石工による加工賃が必要である。その費用を地元の岡田氏が担うことで、遍路を支える道しるべの建立が実現したのである。

道しるべだけではなく。道沿いの多く集落では18-19世紀の「光明真言百万遍供養塔」（石碑）が立っている。集落の大師講のメンバーが、光明真言（大日如来の力を招き入れるための経文）を100万遍唱え、それを記念して村の大師堂の横にたてたものである。この石碑は、弘法大師信仰が地域に浸透していたことを物語っている。

「阿波学」の事前授業でも、こうした道しるべや供養塔、あるいは古文書からみえてくる行き倒れて亡くなった「倒れ遍路」の事例が紹介され、遍路を支えてきた地域文化に着目することの意義が話されている。しかし、やはり歩き遍路実習の中で、実際に目を向けることの効果が大きいことは明らかである。

もちろん、受講生が多分野にわたっていることから、実習中の「遍路実践課題」で、受講生たちだけに答えを見つけさせようとするのはなかなか難しいのが現実である。石碑のどこに注目したらいいのかわからないからである。そこで、教員側が石碑の地点に立ち、悩む学生グループに対して、まずは注目点の提示がなされている。ただし、解説はない。当該の石碑が、遍路道や集落のどの地点に立つのか、石材は何か、何が刻まれているのか、設置したのはいつの、誰なのか。こうした点を、学生グループに問いかけるのである。

3) 国語分野

担当者は教育心理学を専門としているが、遍路と俳句との関係について特化した研究を行っており、ここでは教科横断型授業としての観点から、国語分野の内容に注目することとする。



図3 真念の道しるべ



図4 光明真言百万遍供養塔

事前指導は、下記(1)講義と(2)の演習から成る。また、歩き遍路体験をもとに俳句の創作を行う。ねらいは、俳句という日本発信の文化の象徴機能を駆使し、地域の文化や自然、遍路を支える人々の活動、仲間と協力して道を探しながら歩く体験の意義についての理解を深めることにある。

(1) 遍路と俳句との関係に関する講義

本授業科目における学習活動には、遍路道を歩くという体験が含まれる。体験の意義は、心に刻み込んだり思い返したりすることによって、いっそう深まると考えられる。日本人は、自然、文化、そして人間との交流にもとづく体験を心に刻み込む手段として、俳句という短詩型を生み出し世界に向けて発信してきた。

これまで遍路の途上において、数々の俳句が詠まれてきた。現代においても、各札所の境内にもお遍路さんの俳句が掲示されている。また、俳句の歳時記には、遍路や秋遍路を季語とする俳句が多数掲載されている。それらの俳句の例を簡潔な解説文とともに、事前授業で紹介している。

① 道のべに阿波の遍路の墓あはれ 高浜虚子

庶民が「お遍路」をするようになったのは江戸時代で、歩いている道のどこで果てても郷里には知らせないのが、遍路の覚悟であったという。「遍路」が季語として定着するのは明治時代で、「遍路」を季語とする上で大きな役割を果たしたのは高浜虚子であるとされている。

② 手足より確かなものに遍路杖 鷹羽狩行

最近では気軽な服装で遍路をする人もいるが、本来の遍路は、背に「南無大師遍照金剛」と書かれた白衣を着て金剛杖や鈴などをもち草鞋をはいて歩く。経文と「同行二人」と書いた菅笠をかぶり、「善根宿」に宿泊しながら巡拝する。このため、遍路笠、遍路杖、遍路宿なども季語となっている。この句には、いつも弘法大師とともにあるという「同行二人」の思いが感じられる。

③ 遍路脱ぐ今日のよごれの白足袋を 中村草田男

自己の追求がそのまま俳句の追求になるように自己の内面を生活のうちに詠もうとして、俳壇史上に一時代を築いた「人間探求派」から生まれた句である。自己変容の過程あるいは自我の成長過程を主題とする心理学の観点からみて、興味深い一句である。

(2) 歩き遍路における俳句創作の勸奨とその実施

前項に例示した俳句など先人の俳句を鑑賞しつつ、それらに加え、過年度に歩き遍路授業で創作された俳句を紹介している。当該年度の学生にとっては、俳句をとおして、歩き遍路体験者の生の声を聞くことになる。10～15作品をパワーポイントで紹介し、鑑賞を求める。具体的には、過年度に創作された俳句の中から、有季定型を基準として選定した俳句（例：「秋遍路落つる涙は空海の」、「竹林のすきまに見える秋の空」、「空海と初秋の風に背を押され」、「杖のへり共に歩んだ秋遍路」、「混ざり合う心の涙と秋の雨」）を紹介し、下記の2課題を出している。「①心に響いた俳句を書き写してみよう。②心に響いた俳句のうち、一作品を取り上げ、鑑賞文を書いてみよう。」そして、下記のように語りかけている。

「ここでは、ほんの一部を例示したに過ぎませんが、このほかの作品からも、それぞれの感性で歩き遍路体験をとらえ、自分のものとして表現している様子を伺い知ることができてきたと思います。そこで今年度も、歩き遍路の途上で出会う風物や、同行者や地域の人々とのふれあいをテーマとして俳句を作ることを提案します。俳句という短詩型は創作するだけでなく、相互に鑑賞しあうことで、いっそう深まります。そこで、本授業では、みんなで俳句を読み合う機会を設けたいと考えています。」そして、俳句の創作法を教授している。俳句の約束事は次の二つだけであることを例示とともに伝えている。①五・七・五のリズムを基本とすること。②季語（季節の言葉）をひとつ入れること。加えて、同じことばでも順番を入れかえることでリズムが変わることや季語ではない言葉にも目を向けること。定型を守りながら柔軟に考えることも可能であること等を知らせ、俳句創作への意欲を高めている。

上述の講義と演習の締めくくりとして、まず、大学生の年代で俳句をつくることの意義を伝え、その趣旨を次のように示している。「自らが体験する出会いを季語と結び合わせることによって俳句が生まれます。俳句は古いものだという声も聞かれますが、若い人はフレッシュな感性で率直に詠むことができ、人生経験を積んだ人には深い味わいがにじみ出てくるというよ

表2 俳句の創作法

<p>原 則</p> <p>① 俳句は十七音で、季語が一つ入っていればよい</p> <p>② 俳句のリズム基本は、五／七・五または五・七／五</p> <p>手 順</p> <p>① 俳句に詠みたい季語をみつける。</p> <p>② 季語と直接関係はないが、イメージの近い十二文字の文をつくる。</p>
<p>十二文字 (五文字+七文字) の文+「季語 (+かな)」</p>
<p>「季語 (+や) + 十二文字 (七文字+五文字) の文</p>

うに、それぞれの良さが自然に現れてきます。万人に共通するのは、誰が詠むにしても、その根本に季語があるということです。自分自身の心のかたちを、俳句という五七五の十七音に書き換えていく楽しさを味わってみることをお勧めします。」

次に、歩き遍路の体験をもとに俳句を作ることの意義を教示し、俳句創作への動機づけを高めることを目指している。このときの実際の教示の内容を下記に示す。「遍路の途上では、さまざまな風物に出会います。食事の時には旬の食材、また、地域の人々との交流や、文化や歴史について知る機会もあります。その一つ一つが季語です。歩き遍路は俳句をつくる絶好の機会であるといえます。この機会に、自分自身の心のかたちを、俳句という五七五の十七音に書き換えていく楽しさを味わってみよう。感じたままに俳句にしてみましょう。」

最後に、遍路道で出会う「秋の季語」も例示する資料と、歩き遍路時の俳句創作用紙を配付する。提出欄は2句分（年度によっては、3句分）を設けるが、1句でもよいとする。作品としての稚拙は問わない。

作品の中には、俳句を作った時の思いを綴ってくれたものもあり、また、無記名で俳句を詠み合い、感想文を書き合ったものもあった。中には、友だちと協力して絵や写真とコラボレーションさせた作品もあった。なお、受講生による創作作品の分析を通して人間的成長も検証されている⁽⁷⁾⁽⁸⁾。

4) 英語分野

英語と四国遍路に関する先行研究としては、梶井による「外国における四国遍路情報の伝達状況に関する一考察—日本旅行ガイドブックの記述をめぐって—」⁽⁹⁾と門田リンダ Kらによる「地域における高大連携の一方法—地域文化の理解と英語による発信—」⁽¹⁰⁾がある。それらを把握しつつも、本授業においては、他分野との全体的なバランスを考慮しつつ、課題を提供している。

これまでのところ、出題形式としては、遍路道沿いに設置してある英語（を含む）表記の案内板の間違った英語表現を指摘させるというものである。昨今、「インバウンド」という言葉で象徴されるように、日本を訪れる外国人が急増しており、それに伴い、一般的な観光地ではない四国遍路にやってくる外国人も増加している。そのような状況で、外国人のための案内板の英語表記の正確さが望まれるが、残念ながら、現状は必ずしもそうならない場合もある。以下に、出題した実際に使われていた（間違った）英語表現の一例を紹介し、どのような間違いか解説する。

2018年度に出題した課題である。

三番札所「金泉寺（こんせんじ）」の山門を出て右手に英語で書かれた看板があります。この看板は、お遍路さんに何を伝えるものでしょうか。看板を読んで答えて下さい。また、この英文の間違いを指摘し、正しい英文に書き換えなさい。

案内板（図5）に書かれていた英文は以下の通りである。

Walking Pilgrims (Ohenlo-san) need to follow red arrows on signboards or fingers on stone pillars pointed the way (Henlo-michi) to the next temple.

内容は、「お遍路さんは、次の寺に行く道を指し示す看板上の赤い矢印や石柱に描かれた指の指す方向に行く必要がある」というものであるが、その場合、pointedではなく、pointing でなければならない。

以上、単純な文法ミスやスペリングミスを指摘させるものにとどまっており、物足りなさは否めない。ここからの発展性の可能性として、外国人に英語で遍路を説明するための演習を行い、実際に遍路で外国人と話す課題を盛り込むことなども考えられる。



図5 英語表記の看板

5) 美術分野

四国遍路における美術的側面から見ての文化財については、真鍋⁽¹¹⁾により紹介されているが、同時に

「遍路という行為、修行法を実践してみると意外にも、その礼拝対象をじっと見る事は少ない。初めての人はもちろん、数回まわっても、どこにどのような仏像・絵画があったのか、特に弘法大師の御影などは類似の図像（真如様及び善通寺様）で描かれることが多いので、まわるたびに目がなれて記憶もおぼつかない。」とも述べられている通り、歩き遍路実習において本尊等の本格的文化財を鑑賞する事はなかなか難しいため

ある。本尊は一般的に本堂奥の内陣に安置され薄暗く、実習時にはゆっくり確認する時間もない。このため授業としては受講生から美術に関すると思しき質問が出た際に対応してきた。

2015年度からの「遍路実践課題」に対応するため、同年4月に県北部のルートである第1番札所霊山寺から第8番札所熊谷寺まで及び第11番札所藤井寺から第12番札所焼山寺を取材し62問を提案している。また2016年10月と11月には県南部のルートである第20番札所鶴林寺の手前にある道の駅ひなの里勝浦から第23番札所薬王寺までを取材し16問を提案した。内容としては、実習中であっても比較的確認しやすいと思われる各寺院の境内に配置された彫像や建築物の装飾の様子、石碑・旧跡についての説明、遍路道沿いに点在する建造物の装飾や遍路小屋の形状など、美術的なものに止まらず自由に挙げた。

毎年、質問が選別され実践課題が取りまとめられるが、ここでは例として2019年度に採用された三つの問題を挙げる。まずは、美波町日和佐の町に入って渡る、第23番札所薬王寺を見渡せる赤い欄干の橋の名前と、この欄干に交互にかけられた二種類のイラスト（図6）に描かれたものを問うものである。答えは「やくよげばし」と「海亀と（ちょうさと呼ばれる）太鼓台」であるが、これらを観察する事で、この地域が何を誇りとしているのか見とることができる。



図6 日和佐の厄除橋にかかる2種類のイラスト

二つ目は那賀川から第21番札所太龍寺への道沿いにある「若杉山遺跡」の案内板の内容についての質問で、ここで古代に何が生産されたかを問うものである。答えは辰砂（水銀朱）である。辰砂は高音で加熱すると水銀蒸気を発生させる危険な面を持つ物質だが、現在でも日本画の顔料として専門店で購入されている。最近、この遺跡で1～3世紀頃に作られたと見られる土器の破片がみつかると日本最古の坑道という説も出ている。ここから素材としての色彩顔料やその歴史に興味を繋げてほしいと考える。



図7 太龍寺山門の扁額の文字

三つ目は第21番札所太龍寺の境内東端にある山門にかけられた扁額に書かれた舎心山という文字の書体（図7）を問うものである。一般的に扁額は多くが筆書きの書体をベースにしているが、ここの文字は絵巻などで山中に立ち昇る（時として神などが乗る）雲の形をベースにしていると考えられ、非常に興味深い書体をしている。文字を見ると普通はその意味のみに目が行きがちだが、形や表現の工夫にも注意を払わなければならない。



実践課題に取り上げられたこれらの問いに、美術教育の視点から歩き遍路実習を通して望まれる教育効果を確認することができる。造形行為には創作意欲を形作る文脈や素材との対話があり、それゆえ様々な視点が必要である。教員となる受講生には、この実習を通して幅広い事柄への興味と観察力を、更には広範な理解と応用力の向上が期待される。

6) 保健体育分野

(1) 事前指導

本授業は、開設当初より「歩き遍路」を追体験するために、歩行による遍路を実施することが目的の一つであった。歩行を通じた遍路の歴史の体験は、座学による学習とは違った学習効果が期待されている。

しかし、運動不足や体力低下が叫ばれる昨今、長距離の歩行には参加者の体力不足が懸念された。また野外での活動は、様々な危険も想定され、運動・野外活動を専門とする保健体育分野の専門家の参加が求められた。

特に、本学のある徳島県下での歩き遍路は「遍路ころがし」と呼ばれる山道を含み、四国遍路道の中でも危険

な区域としてあげられている。これらを鑑み、例年9月に実施される実習に向け、7月のオリエンテーションでは歩き遍路に関する準備内容を伝えている。

オリエンテーションにおいて提示した主な留意点の概要を下記にあげる。

① 歩き方に関する注意

- ・1日の歩行距離20km, 歩行速度：時速4km～6km
- ・120～150拍/分の持久的な運動をしておく
- ・登り坂, 下り坂の歩行訓練
- ・こまめに水分を摂取する

② 運動負荷

- ・心拍数(HR: Heart Rate)による運動負荷の把握
- ・主観的運動強度の説明

③ 服装

- ・半袖シャツまたは長袖シャツ(化繊製が望ましい)
- ・長ズボン(綿製品は汗や雨で動きづらくなる)
- ・帽子(黒い帽子はハチに狙われるので避ける)
- ・靴・靴下(履き慣れた厚底の靴・厚手の靴下)

④ 熱中症対策と手当て

- ・喉が渇く前に水分・糖分・塩分を摂取すること
- ・めまいや吐き気の症状が出たら、各部を冷やし、着衣を緩めて日陰で休憩すること。血色不良時は足を挙げて横になること。
- ・悪寒のある時は乾いたタオルで皮膚のマッサージをおこなうこと。
- ・意識喪失・発汗停止が起きた場合、医療機関へ連絡し、頸動脈や腋窩部・鼠蹊部を氷等で冷やすこと

実際の歩き遍路では、伴走車を配し、緊急時には病院に搬送するよう備えている。例年9月に実施されるため、気温が30度を超えることもあったが、熱中症により搬送される事例は現時点まではない。なお、長距離の歩行による筋肉や全身の疲労困憊、水腫・水泡などが多く、ストレッチやセルフマッサージや、水泡処理法などに留意を促している。

(2) 遍路実習における野宿班

これまでの遍路実習では1泊から2泊を宿泊した。宿泊先は、いわゆる宿坊と呼ばれる寺が準備する宿泊施設や、遍路近隣に開設される宿泊施設を利用している。遍路巡礼中に宿泊する場合、このような宿泊施設を利用する他には、遍路宿と呼ばれる民間の宿泊所や、場合によってはお接待と呼ばれる無料で宿泊を提供する民家を利用することもある。また遍路道中に設けられた休憩所で簡易に野宿をする場合もある。これらの休憩所は、遍路道を文化遺産として後世に残すために、道の整備とともに適所に設けられつつある。近年、幹線道路には多くのコンビニエンスストアが設けられ、道中の飲料水・食料の購入は簡易になっている。また鉄道会社の駅舎や道の駅などで、巡礼者が持参した宿泊装備を利用して巡礼を続ける者も少なからず存在する。

歴史的にも巡礼者が野宿をしながら遍路を続けることが多く、巡礼者は『橋の上で杖をつかない』というマナーも、橋の下で雨露をしのぐ巡礼者に対する配慮とも言われている。

本実習では、安全や地域住人への配慮からテント泊での遍路実習を行う班を設けた。宿泊のためのテントや寝袋・シュラフカバー・マットは伴走車により運搬し、食事は、周辺の食堂やコンビニエンスストアを利用、朝食はキャンプ用のガスバーナーなどで自炊とし、早朝の出発に備えた。宿営地は、遍路近くの公園や道の駅を利用した。宿営地を選ぶ留意点としては、①幹線道路との適切な距離、②荒天時の避難方法の確保、③静音でありながらも安全な環境、④水道、⑤トイレなどを備えた平地を宿営地とした。巡礼中トイレは、寺院や公衆トイレを利用させていただくが、宿泊時の衛生環境としても大きな留意点である。遍路における寺院は、他の巡礼者への影響もあり、境内での宿泊は固辞された。

遍路には巡礼者の野宿を前提とした休憩所も多く、安価で入浴を提供する温泉や、洗濯機・自転車などを無料



図8 野宿班の活動

で貸しだしたり、更衣もできる小屋を解放する施設もある。本実習では、巡礼者の方とそのような施設を共同利用し、巡礼の邪魔にならないよう配慮した。野宿での遍路体験は、このような巡礼者との交流も大きな体験である。

(3) 遍路実践課題

これまでの遍路と運動に関する先行研究⁽¹²⁾⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾を参考に、2019年度は体温に関する以下のような課題を提供した。

畠山先生の太龍寺到着直後の体温は何度（小数点1ケタまで）でしょうか。さらに、到着後に水分補給をし、30分休憩した時の畠山先生の体温は何度でしょうか。なお、畠山先生は発汗性のよい服装をし、スタートから太龍寺までは歩いて登ります。その日の太陽光や畠山先生の体格等から判断する代謝量なども踏まえて考えてください。

この年の夏は気温が高く、熱中症等の多くの事象がテレビ等で報道されており、これからの小中学校における野外活動において、安全性の確保の観点から、運動と体温の関係を学生に理解させていくことを意図し、解説している。

また、この遍路実習における夜のミーティングでは必ず、ストレッチ運動の指導が行われ、自分の身体への意識を高める試行錯誤がなされている。



図9 課題解説とストレッチ実習

5. 授業評価分析

1) 質問項目の評定に関する分析

ここでは「阿波学」に対する授業評価アンケートの質問項目に関して分析する。なお、授業評価アンケートの質問項目は2012年度以前と以後で内容が変更されているため、ここでは2012年度以後のものを対象とする。

表3は、2012年度以後の授業評価アンケートの各質問項目に対する各年度における受講生の平均評定値を示したものである。以下では、平均評定値が高い質問項目に注目し、本授業の特徴を指摘する。なお、2018年度は2日目が雨天となり、予定していた行程を短縮変更した。例年の秋晴れの歩き遍路とは違い、雨天の歩き遍路となったことも評価に影響が出ていることと想定される。

「1 授業の計画と内容について」では、いずれの質問項目も各年度の評定値がすべて4以上の高い評価が得られている。このことは、授業概要に記述されている目標・授業計画・内容が明確に示されていることに加えて、受講生が、授業内容を授業の目標とつなげて、教養を深め、教育の見方・考え方、専門的知識等を理解できるものであると認識していることを示している。年度を追って積み重ねられる授業改善によって、授業内容が確実に精練されてきていることが窺えよう。2018年度から新たに質問項目に加えられた「(5)授業では、シラバスに示されたアクティブ・ラーニングが実施されていた。」も4以上の高い評価を得ていることから、歩き遍路という受講生自らが積極的に活動する要素を含む本授業がアクティブ・ラーニングとしても充実したものであると認識されていることが示唆されよう。

「2 授業の進め方について」では、2018年度の1項目以外はすべての質問項目で4以上の平均評定値が得られ、いずれも高く評価されていることが示唆された。

「3 あなたの授業への取り組みについて」については、「(8)授業によく出席し、積極的に取り組んだ。」や「(10)授業内容をよく理解するために教員に質問したり、他の学生と話し合ったりした。」については平均4以上の高い評定値が得られ、受講生が授業内の活動については積極的に取り組んでいることを示唆するが、「(9)授業内容をよく理解するために予習・復習（課題への対応や参考文献の読書等を含む。）をした。」では、本アンケートの質問項目の中で唯一平均値が3点台であり、依然として受講生の学習活動を授業外にも広げられる工夫が必要であることが示唆される。ただし、各年度の評定値の推移をみると、2016年度には4.0と向上しており、近年の授業改善の効果が徐々にみられてきていると考えられることから、今後も更なる工夫を重ねる必要があろう。

「4 授業に対する総合的評価」の「(11)総合的に評価して、この授業は満足できるものであった。」については、平均4.41と高い評定値を示し、受講生は本科目について総合的に満足していることが示唆される。この授業での講義内容や歩き遍路の活動内容に対する取組が総合的な満足度の向上に結びついていることが窺える。

表3 2012～2018年度の「阿波学」に対する授業評価・質問項目の平均評定値

質 問 項 目		年度 回収数							平均
		2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
		n=50	n=74	n=75	n=91	n=68	n=79	n=71	
1. 授業の計画と内容について	(1) シラバス等には到達目標とそれを達成するための授業計画や課題成績評価の方法が明確に示され、その内容を教員は適切に説明した。	4.4	4.4	4.4	4.5	4.4	4.4	4.3	4.40
	(2) 授業内容は、シラバス等によって示された授業計画や課題に沿っていた。	4.4	4.4	4.5	4.5	4.3	4.4	4.2	4.39
	(3) 授業内容は、授業の目標とつなげて、教養を深めたり、教育の見方・考え方、専門的知識等を理解できるものだった。	4.2	4.3	4.4	4.4	4.2	4.4	4.1	4.29
	(4) シラバス等によって示された評価方法が適切に実施された。	4.1	4.2	4.1	4.4	4.2	4.3	4.0	4.19
2. 授業の進め方について	(5) 授業では、シラバスに示されたアクティブ・ラーニングが実施されていた。	—	—	—	—	—	4.4	4.2	4.30
	(6) 教員の授業に取り組む姿勢（音声や熱心な態度等を含む）は適切なものだった。	4.5	4.4	4.4	4.5	4.4	4.1	3.9	4.31
	(7) 私語等の学生の学習態度への指導が、必要に応じて行われた。	3.9	4.0	4.4	4.4	4.3	4.1	4.0	4.16
3. あなたの授業への取り組みについて	(8) 授業方法は、学生が授業内容をよく理解できるように工夫されていた（補助資料の配付・活用や教育機器の利用等を含む）。	4.0	4.3	4.3	4.3	4.1	4.1	4.1	4.17
	(9) 授業によく出席し、積極的に取り組んだ。	4.6	4.4	4.6	4.7	4.6	4.6	4.5	4.57
4. 授業に対する総合的評価	(10) 授業内容をよく理解するために予習・復習（課題への対応や参考文献の読書等を含む。）をした。	3.7	3.7	3.7	3.8	4.0	3.9	4.0	3.83
	(11) 授業内容をよく理解するために教員に質問したり、他の学生と話し合ったりした。	4.0	3.9	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.06
(11) 総合的に評価して、この授業は満足できるものであった。		4.3	4.6	4.6	4.7	4.4	4.3	4.0	4.41

5. そう思う 4. ややそう思う 3. どちらとも言えない 2. あまりそうおもわない 1. そう思わない

2) 自由記述に関する分析

ここでは、最近3年間（2016～2018年度）の授業評価アンケートで「あなたの満足度に対する理由と授業改善に向けての提言」として問われた自由記述の内容について分析する。

自由記述の内容でまず顕著なものは、本授業の目的・主旨・到達目標に直接的に関わるものである。例えば、「実際に遍路道を歩いたことでわずかではあるが、四国の文化、お遍路に関心を持つことができた。」「歴史を感じることができた。」「2日間お遍路をすることで、普段感じることもない気持ちや自然に触れることができ、充実していた。」といったものである。これらの記述内容から、本授業の目的・主旨・到達目標である“遍路を体験的に学ぶことを通じ、地域理解を深め、その文化や伝統をまなざす態度や関心を養う”ことや“現地体験の中で地域の伝統や自然を学ぶ”ことが確かに達成されていることを示している。このことは、高い評定値の結果を内容的にも裏付けたといえるであろう。

次に顕著であったのが、歩き遍路の班活動において班員と協力して活動できたことに関する内容である。例えば、「班で協力して円滑に取り組むことができた。」「みんなで協力して最後の地点まで行くことができた。」「みんなと協力し合って自然に囲まれた遍路道を歩いてとても充実した時間を過ごせたと思う。」「班員と協力して楽しく歩くことができて、良い思い出になりました。」といったものである。これらの記述内容から、歩き遍路の班活動が班員同士で協力することが促され、社会性やコミュニケーション力の育成にも肯定的な効果があることが示唆されたといえる。受講生が将来、学校教員として教育現場で活躍する際に、教員同士の関係、児童・生徒との関係を良好なものにするため社会性やコミュニケーション力は不可欠であることから、本授業の内容が教員養成の観点からも重要な位置づけを持つものであることが窺えよう。

加えて、よくみられた記述内容が、歩き遍路を体験したことで生じた肯定的な心情に関するものである。例えば、「山道楽しかった。」「遍路の2日間はすごく楽しかった。」「すごく大変だったけど、達成感がありました。」「なかなか経験することができないことを味わうことができたので、満足です。」といった記述である。これらは、歩き遍路の体験には、楽しさ、達成感、満足感といった肯定的な心情を呼び起こす要素があることを示唆している。この肯定的な心情が評定値でも示された高い満足感を支えているものと思われる。歩き遍路を体験して

これらの肯定的な心情は、本授業の目的・主旨・到達目標に直接的に関わるものではないと捉えられるものの、授業に対する積極的な取り組みや学習意欲を支える要因としては重要な役割を担うものであると考えられよう。今後の歩き遍路の活動においても、楽しさ、達成感、満足感といった肯定的な心情が十分に味わえる要素を含むものにすることも重要な留意点になるものと考えられる。

6. おわりに

歩き遍路を主体とする鳴門教育大学「阿波学」授業（学部）には、発足から今日に至るまで、延べ922名受講生があり、平均受講者数は76.8名である^(註3)。鳴門教育大学の学部入学定員が100名であり、ほとんどの受講生が1年次に履修していることから、鳴門教育大学の学生はかなりの高率で「阿波学」を受講していることになる。一方、大学院授業「四国遍路と地域文化」においては教職大学院化に伴う授業編成の中で、本授業の履修が困難になっていることが伺える。

前述したように、1泊2日（2014年度までは2泊3日）受講生と担当教員が寝食を共にし、歩き遍路を実践する中で担当教員それぞれの専門分野から授業展開がなされている。このことを通して、授業目的および目標に関わるコンテンツは受講生に十分提供されていると言えよう。

梶井⁽¹⁹⁾が10年前に報告した時点では9大学で講義や歩き体験を取り入れた授業が存在したが、各大学のシラバスを確認したところ、現在では鳴門教育大学をはじめとする6大学であり、その中で歩き遍路を実施しているのは4大学である^(註3)。さらに、宿泊を伴う歩き遍路を主体とした教科横断型授業を実践しているのは鳴門教育大学だけとなっている。

歩き遍路に伴う運営上の課題として、次のことが指摘できる。

- ① 歩き遍路を主担当する教員の転出および退職があると歩き遍路は継続できていない。
- ② 鳴門教育大学においても担当者の高齢化（平均年齢53.2歳・令和2年度末現在）が進んでおり、体力的に受講生と全行程（特に山道）を歩くことが難しくなっている。

上記①においては、主担当教員が歩き遍路実施に向けて受講生の安全確保・札所および関係諸団体との連絡調整等々いかに多くの労力を要しているかが推察できる。②に関しては、現在、大学院改組に伴う採用人事が数年凍結されており、担当者の若返りが望めない状況にある。しかし、「教育の一番札所」を唱える鳴門教育大学が地域文化の柱とも言える四国遍路を活かした教科横断型授業を実施することは、さらなる教師教育としての大学の特色と存在感を宣揚できる可能性を有しており、大学の戦略的構想として何らかの方策がなされる必要があろう。

また、授業内容上の課題も山積する。第一には、遍路歩きを実施するに当たって目的意識や計画立案を主体的に行うことを、未来の教師の立場からどう計画し、何に注意が必要なのかを、考える場としていくことである。

第二は、五感を使うことで得られる印象や体験が、受動的に入ってくる情報とは異なり、自分を内側から変化させるインパクトをもつとするならば、学生自身が歩き遍路を実践して獲得した自分なりの「問い」を、次の考察につなげることを意識的に追求することが必要である。

例えば「遍路実践課題」を考える中で生まれた疑問に、まずは、同じ参加者同士で共有しあう場を設定することで、時にその多様さの中で自らの視点を相対化していくことが可能となろう。一方で、「問い」に向きあい考察することは、そう簡単なことではない。時には、懐深い各学問の専門的考察に敷衍していくことも必要であろう。授業の枠を越えることにはなるが、「問い」に対する一つの解答を、その後の学生生活の中で求めていく道につなげる手立てを創造することも、今後の課題として行きたい。

一文 献

- (1) 鳴門教育大学戦略的教育研究開発室（「四国遍路」プロジェクト推進委員会）『遍路文化を活かした地域人間の育成 ― 歩き遍路による「いたわり」情操教育と遍路地域の「まるごと博物館」構想 ― 報告書』2010
- (2) 梶井一暁、大石雅章、木原資裕、久米禎子、立岡裕士、内藤隆、中津郁子、町田哲、皆川直凡、南隆尚、山本準、山根秀憲「学生教育における四国遍路歩き体験授業の意義と課題 ― 「阿波学」の試み ―」『鳴門教育大学授業実践研究』第10号、pp. 3-9, 2011
- (3) 文部科学省「次期学習指導要領答申について（中央教育審議会（第109回）資料）」2016

https://www.mext.go.jp/content/1377021_1_1_11_1.pdf

- (4) 長谷川賢二「弘法大師信仰・巡り・霊場ネットワーク — 四国遍路の歴史をめぐって —」『四国遍路展〈徳島編〉』四国遍路展徳島実行委員会, 2014
- (5) 大石雅章「四国遍路と弘法大師信仰」『四国遍路と世界の巡礼1』2016
- (6) 白木利幸「宥辨真念と四国遍路」『日本研究』〈国際日本文化研究センター〉21, 2000
- (7) 皆川直凡「心理学からみた歩き遍路体験, その人間形成的意義 — 学生による創作俳句の内省・説明文と鑑賞文の分析から —」『鳴門教育大学研究紀要』26, pp. 35-42, 2011
- (8) 皆川直凡, 佐々木智美「歩き遍路体験に伴う感動が人間的成長に及ぼす影響 — 学生による創作俳句600句に詠み込まれた情景と心情の分析から —」『鳴門教育大学研究紀要』29, pp. 1-14, 2014
- (9) 梶井一暁「外国における四国遍路情報の伝達状況に関する一考察 — 日本旅行ガイドブックの記述をめぐって —」『鳴門教育大学学校教育研究紀要』25, pp. 79-84, 2010
- (10) KADOTA Linda K., NISHIMURA Hiroko「Connecting Area Colleges and High Schools Through the Appreciation of Local Culture」『松山東雲女子大学人文科学部紀要』28, pp. 101-117, 2019
- (11) 真鍋俊照「四国遍路の美術と弘法大師信仰」『国文学解釈と鑑賞』至文堂, pp. 39-53, 2005
- (12) 中雄勇「歩数と心拍数からみた四国歩き遍路の身体活動量について」『ウォーキング研究』7, pp. 75-79, 2003
- (13) 棟方百熊「四国遍路の教材化に関する基礎的研究 — 主観的運動強度と楽しさの関連について —」『四国大学紀要』33, pp. 17-24, 2009
- (14) 杉原潤之輔, 松井敦典「四国遍路の体育学的研究 — 徳島県のへんろ道に関して —」『鳴門教育大学研究紀要. 生活・健康編』5, pp. 23-37, 1990
- (15) 鍛冶博之「徳島文理大学総合政策学部における「体験型」初年次教育の成果と課題 — 2017年度「遍路ウォーク」と「新入生宿泊研修」を例に —」『徳島文理大学研究紀要』95, pp. 81-93, 2018
- (16) 高垣忠一郎「『自分さがし』への道案内」『新・かたりあう青年心理学』青木書店, 1999
- (17) 伊藤美奈子「思春期・青年期の意味」『思春期・青年期臨床心理学』朝倉書店, 2006
- (18) 河合雄雄『大人になることのむずかしさ』岩波書店, 1983
- (19) 市川ひろみ, 佐伯羊一, 原映子, 徳永英幸, 阿部清子, 渡邊陽子, 岡田ゆず「一般教育科目「地域文化論(歩き遍路体験学習)」授業報告 — 結願までの道のり —」『今治明德短期大学研究紀要』34, pp. 47-61, 2011
- (20) 細谷洋子, 田村典子, 范永輝「四国遍路「歩き」と心身の気づきを深める大学体育授業 — 第1番～第6番札所の歩き遍路体験を通して —」『四国大学紀要』25, pp. 79-84, 2010
- (21) 細谷洋子「生涯スポーツ教育を通じた地域文化理解 — 四国遍路を活用したウォーキング授業のねらいと成果について —」『自由時間研究』43, pp. 81-87, 2018
- (22) 田村隆宏, 南隆尚「大学院生の道徳的意識に及ぼす遍路体験の影響」『教育実践学論集』10, pp. 81-88, 2009
- (23) 梶井一暁「大学と学校の連携による四国遍路歩き実践に関する研究 — 遍路を活かした人間形成プログラムの開発に向けて —」『鳴門教育大学研究紀要』26, pp. 20-34, 2011
- (24) 橋本康弘, 荒井紀子, 伊禮三之, 山本博文, 香川喜一郎, 奥山和彦, 下池未紗, 松田真衣, 市川薫, 鎬木優佳, 永井良次「『教科横断型授業』の開発研究Ⅰ — 2008・2009年度協働実践研究プロジェクトでの取り組みから —」『福井大学教育実践研究』35, pp. 67-78, 2010
- (25) 松田淑子, 荒井紀子, 伊禮三之, 山本博文, 橋本康, 池島将司, 行壽浩司, 二丹田雄一, 山田志穂, 吉村祐美「『教科横断型授業』の開発研究Ⅱ — 2008・2009年度協働実践研究プロジェクトでの取り組みから —」『福井大学教育実践研究』36, pp. 35-42, 2011

— 注 —

- (1) インターネットによるシラバス検索では, 四国遍路に関する講義や実習を授業で行っている大学は, 2020年4月現在, 鳴門教育大学ほか, 徳島大学・徳島文理大学・四国大学・愛媛大学・香川大学の6大学である。
- (2) 例えば徳島県内であれば, 徳島県教育委員会編『遍路道〈徳島県歴史の道調査報告書〉』(徳島県教育委員会, 2001年)が, 現地踏査をふまえて, 道しるべ等の設置場所・種類・刻字翻刻(部分)等を示している。
- (3) 歩き遍路を行う学部対象の「阿波学(地域文化研究)」と大学院対象の「四国遍路と地域文化」における履修者(2008年度～2019年度)は以下のようになる。

(4) 鳴門教育大学のほか、徳島大学は一般教養科目「空海と歩く～歩き遍路の世界～」として冬休み、土・日・祝日を利用して実施している（宿泊なし）。愛媛大学は法文学部専門教育科目「地域フィールド実践」集中授業として、1日約20kmを歩くとしている（宿泊なし）。徳島文理大学では初年次教育として「遍路ウォーク」と「宿泊研修」を合わせた形で実施している事が報告されている。午前中に極楽寺（2番札所）から霊山寺（1番札所）まで遍路ウォークを行い、午後に淡路島で宿泊研修がなされている⁽¹⁵⁾。

年度	受講者数	
	学部	大学院
2008	101	29
2009	69	12
2010	63	8
2011	50	8
2012	58	10
2013	77	15
2014	81	10
2015	93	7
2016	80	4
2017	85	3
2018	76	2
2019	89	1
合計	922	109
平均	76.8	9.1

The Practice of an Interdisciplinary Class in “Awa (Tokushima) Studies” at Naruto University of Education with the Central Theme of Walking Pilgrimage

KIHARA Motohiro*, MINAGAWA Naohiro**, TATUOKA Yuuzi***,
YABUSHITA Katsuhiko****, NAITO Takashi*****, TAMURA Takahiro*****,
MINAMI Takahisa*, MACHIDA Tetsu***, KUME Teiko*****,
MANO Miho****, HATAKEYAMA Teruo*** and OGURA Masayoshi*****

Naruto University of Education offers an undergraduate class called “Awa (Tokushima) Studies”, which is taught by twelve instructors whose specialties span history, geography, psychology, art, physical education, and linguistics. In this class, after studying the background and history of Ohenro, a pilgrimage route in Shikoku, in classroom lectures, the students and the instructors walk a part of the pilgrimage route on a one-night-two-day trip, in which interdisciplinary studies are practiced.

This class is an ideal opportunity for teacher training and therefore can serve to strategically promote Naruto University of Education as a unique university in offering such a class.

*Naruto University of Education Health and Physical Education Course

**Naruto University of Education Learning Leadership Development Course

***Naruto University of Education Social Science Education Course

****Naruto University of Education English Education Course

*****Naruto University of Education Fine Art Education Course

*****Naruto University of Education Early Childhood and special Needs Education Course

*****Naruto University of Education Clinical Psychology Course